

	<p>れ11月20-21日および11月26日にいずれも仙台市内で開催予定であることが報告された。またヒラメ分科会は2月に開催を予定している（日程未定）。なおホシガレイ分科会およびマコガレイ分科会については被災各県の状況により本年度も開催を見合わせることで了承された。</p>
<p>2．協議事項</p>	
<p>(1) 平成24年度水産研究開発成果情報候補課題の検討</p>	<p>以下の5課題について検討の結果、若干の加筆修正のうえ当部会における研究成果情報とすることが承認された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)陸奥湾におけるアカガイ増養殖技術の開発 2)仙台湾アカガイの資源状況と管理手法の検討 3)エゾアワビ資源に対する東日本大震災の影響 4)東日本大震災以前の仙台湾天然アカガイと人工種苗の遺伝的多様度 5)津波後の岩手県宮古湾におけるアマモ場および稚魚の状況
<p>(2) 資源生産部会に対する要望事項（研究ニーズの検討）</p>	<p>2件の要望事項について検討し、それぞれ対処方針案を決定した。（別紙のとおり）</p>
<p>(3) 推進会議への要望</p>	<p>親会議である東北ブロック水産業関係研究開発推進会議に以下の2点を要望することが合意された。</p> <p>東日本大震災以降、沿岸域の漁場環境、漁業資源や生態系は変化を続けている。これらに対するモニタリング調査が極めて重要であり、現在実施されている各種の調査・事業等について引き続き実施できるよう関係機関に要望していただきたい。</p> <p>多くの研究機関でマンパワーが不足していることから、大学等も含めて研究機関同士が連携してデータ共有等を行い、効率的な調査研究が実施できるような体制づくりを進めていただきたい。</p>
<p>3．その他</p>	<p>水研センター本部横山研究主幹より磯焼けに関する情報交換について説明があり、北日本・西日本というブロック分けについて意見交換が行われた。二分して進めるのではなくブロック間で連携、情報共有を十分に図る必要がある等の意見が出された。</p> <p>大河内資源増殖グループ長が東北水研宮古庁舎の再建状況について説明した。</p>

(別紙) 資源生産部会に対する要望事項(研究開発ニーズ)の検討

機関名	課題名	背景・問題点等	重点を置くべき研究内容	協議してもらいたい推進会議・部会名	想定される連携先	対処方針
宮城県水産技術総合センター	サケマス類養殖業における遺伝子解析を活用した育種研究	<p>1. 国内においてギンザケ海面養殖が開始されて30年以上が経過したが、1996年に水産資源保護法が改正されたことにより、米国産の天然ギンザケ卵の輸入が制限され、現在に限られた国産親魚由来の卵が養殖用に使用されている。このため、近交に起因すると考えられる歩留まりの低下や形態異常魚の発生が問題となっている。また、一部の民間企業は高成長を目的に育種したギンザケ卵を米国から輸入しているが、病原体持ち込みや近交による歩留まりの低下が問題となっている。したがって、ギンザケ養殖を安定的に持続するためには、遺伝的多様性を保持しながら、国産の高成長ギンザケ卵を安定的に生産する必要がある。</p> <p>2. ノルウェイやチリではサケマス類養殖の振興が著しく、高品質な刺身等の商材としてタイセイヨウサケやニジマス等が大量に輸入され高値で取引されている。これらの影響等で本県のギンザケ養殖は魚価が低迷しており、ギンザケに替わる新魚種の開発が求められている。</p>	<p>1. 遺伝的多様性を考慮したギンザケ高成長系統の作出</p> <p>(1) 宮城内水試で継代飼育しているギンザケの遺伝子を解析し、高成長に関連したDNAマーカーを探索する。さらに、高成長でかつ遺伝的距離の遠い個体間で交配することにより、近交の影響の少ない、高成長系ギンザケを作出する。</p> <p>2. ギンザケに替わる養殖サケマス類の開発</p> <p>(1) サクラマス：宮城内水試が保有している当歳の秋にスマルト個体が多く出現する系統の海面養殖試験を行い、高成長個体の遺伝子解析を行うことにより、現行のギンザケ養殖と同じ工程で海面養殖が可能なサクラマス系統を作出する。</p> <p>(2) その他の魚種：海外で海面養殖魚種として成功しているタイセイヨウサケやニジマス等について、国内での養殖の可能性を検討する。</p>	関係推進会議・部会	東北水研	<p>(資源生産部会対処方針案)</p> <p>1. (1) ギンザケにおいて、高成長など形質と連鎖したDNAマーカーを特定することは、3世代交配試験と多数のDNAマーカー解析が必要となるため、すぐには困難である。当面の対策として、親魚の個体間の遺伝的距離を調べ、近交をさけるため遺伝的距離のできるだけ離れた高成長個体間での交配による選抜は妥当と考えられる。作出した系統の保護などのため、外部へ出すものについては、3倍体化など何らかの不妊処理も検討する必要があると考えられる。</p> <p>2. (1) 三陸地域のサクラマスは、一部の個体は秋にも降海することが知られているので、その性質を海面養殖用種苗として活用することは、有効と考えられる。</p> <p>2. (2) 大西洋サケなどの養殖は、海洋環境条件などの面からノルウェーなどに対抗するのは困難と考えられる。ヒメマスの海面養殖は実績がないが、30cm程度の大きさでも十分な商品価値のあるので、検討の余地があると考えられる。</p> <p>これらのうち早期に実現可能な課題については宮城県水産技術総合センターと東北水研とで連携して共同研究課題とし、外部資金獲得も視野に連携を図りたい。</p>
京都府農林水産技術センター海洋センター	二枚貝類の活力指標の開発	<p>二枚貝類の大量死の発生は、養殖員だけでなく天然貝においてもしばしば見られ、全国的な問題となっている。しかし、二枚貝類の死亡原因についての知見は魚類に比べ極めて少ないため、現状では二枚貝類の死亡原因を特定できることは稀である。二枚貝類は魚類等と異なり外観等では健康状態を把握することも困難であるため、このことも死亡原因が特定できない大きな要因となっている。</p>	<p>死亡原因として疑われ、実験的に検証可能と考えられる項目(高水温、低塩分、餌料不足等)について、対象貝に負荷を与えて、その応答を生理、分子動態等の視点で明らかにする。</p>	北海道、東北、中央、日本海、瀬戸内海、西海ブロック推進会議。水産増養殖推進会議。	増養殖研、東北大学、島根県(宍道湖シジミ)、	水産増養殖推進会議および瀬戸内海ブロック推進会議での検討結果を踏まえて適宜対応する。